



梯 久美子氏

連合駿台会七月特別例会

「この父ありてー」

昭和の父と運命の娘」

ノンフィクション作家 梯久美子氏

連合駿台会七月例会を、令和五年七月十八日（火）十七時三十分より、ロイヤルパークホテル「有明の間」で、梯久美子氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、田村駿会長から次のような挨拶がありました（挨拶主旨）。

大変な猛暑の中、大勢の方にご列席いただきまして、本当にありがとうございます。

あまり目新しいニュースはないのですが、私立学校法の一部を改正する法律案が去る四月二十六日の参議院本会議において承認、可決され、令和七年の四月一日から施行されることとなりました。改正の詳細につきましては、ホームページでご覧いただきたいと思



連合駿台会報

No.362 令和5年9月15日発行
発行・編集 連合駿台会

発行人 広報委員長・齋藤柳光

編集人 事務局・矢嶋まゆ子

〒101-0052 千代田区神田小川町三十二

明治大学「紫紺館」内

電話（〇三）三二九六―四七四七

印刷 有限会社 美創

ますが、「執行と監視・監督の役割の明確化・分離」の考え方から、理事・理事会、監事及び評議員・評議員会の権限分配を整理し、私立学校の特性に応じた形で「建設的な協働と相互けん制」の確立がこの改正の基本的な考え方です。これは執行と監事の役割の明確化と分離について、某大学のような不祥事が二度と起きないようにということで、コンプライアンスの徹底、総合建設機能を明確化したガバナンスの強化、そして向上、これを目指すものと思います。

母校・明治大学では、コンプライアンス並びにガバナンスにつきまして、柳谷理事長のもと、しっかりと運営しておりますので、ご安心いただきたいと思います。また、評議員会は、教職員四十四名、そして校友四十四名の計八十八名で構成されており、校友四十四名のうち三十六名が連合駿台会の会員で、八〇%以上を占めております。まさに大学の事業運営を下支える評議員がわが連合駿台会から多数選出されているということは、大変素晴らしいことであると同時に、皆さんにも自信と誇りを持っていただきたいと思います。

当会の前身の一つであります茗水クラブの誕生から今年で七〇年、大変長い歴史を経てまいりました。これはこの間に培われた、大学からの絶大な信頼の証だと感じております。

九月十四日、創立七〇周年記念式典を開催いたしますので、万障繰り合わせの上、ご参加いただきたいと思います。

本日の講師・梯久美子さんは、当会のために札幌からお越しいただきました。日本経済新聞の連載等でご存知の方も多いかと思いますが、私をはじめ昭和時代の皆様方にとりましては、特に感動的なお話が伺えるのではないかと大いに期待しているところです。

短い時間ではございますが、どうぞ最後までお楽しみいただきたいと思います。

当日の講演の主旨は以下の通りです。

*

故・大塚初重明大名誉教授との思い出

本日はこのような素敵な雰囲気のお招きいただき、とても恐縮しております。

明治大学と言いますと、私にとりましては考古学者の大塚初重先生には、私のデビュー作『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』執筆の際、いろいろなお話を伺いました。ご承知のように栗林中将のお孫さんは、明治大学出身の新藤義孝・元総務大臣です。

大塚先生は太平洋戦争末期の一九四五（昭和二十）年四月十四日未明、海軍兵として乗り組んだ輸送船が中国大陸の上海に向かう途中、停泊時に済州島沖でアメリカ海軍潜水艦に雷撃され、積み荷の魚雷が誘爆されました。甲板に上がる階段は焼け落ちており、垂れ下

がっていたクレーンのワイヤーに飛びついて海上に逃れましたが、続いて胴や脚にすがりついてきた他の乗員らを、振り落としてしまった苦い体験もありでした。

乗船していた船が米軍に撃沈され東シナ海を漂流した体験は二度に及び、神の国日本は絶対に敗けないと教えて込まれてきたが、その時初めて日本は敗ける、もし自分がここで助かってその後の命があるのなら、一から歴史を見直し、神話のような歴史ではなく、誰にでも見てわかる証拠、出土したものから探る「歴史考古学」を学ぶことを志したと言われていました。

残念ながら昨年お亡くなりになりましたが、不思議なご縁でもありますので、この場でお話できることに、改めて感謝しております。

昭和三年生まれの私の父は、高等小学校卒業後、昭和十九年に十六歳になる直前ぐらいに陸軍少年飛行兵学校に入りました。翌年終戦を迎えますので、戦場には行っていないんですけれども、父が少年兵だったというのは長い間納得できなかったと言いますか、何でそんなに兵隊になろうと思ったのだろうか、不思議に思っていました。基本的に飛行兵に憧れていますから特攻ですよ。特攻が行われていると分かって進学していますし、ちよつとこだわりのようなものを持っていた

ような気がしていたのです。

私は四十歳くらいから執筆を始めましたが、先ほども述べたように最初の本は、硫黄島総指揮官・栗林忠道中将でした。島を任された指揮官というのは、最期はみんな大本営に向けて「決別電報」と言うものを打つのですが、その電報の内容が大本営によって改ざんされて、新聞やラジオニュースに発表されていたのです。中でも、辞世の歌「国の為 重きつとめを 果し得で 矢弾尽き果て 散るぞ悲しき」の「悲しき」が「口惜し」と改ざんされていたことです。散るぞ悲しきというのは、部下が亡くなっていくことを指揮官が悲しいと詠んでいる、至極当然だと思えますけど、当時は、士気が下がるということ、絶対に言ってはいけないタブーなんです。ただし玉碎は迫っていますから、「口惜し」と、大本営が書き変えたわけです。しかし元の電報が見つかっていなかったため、ずっとそう信じられていたのですが、私が偶然それを発見してしまったんですね。それで、これはやっぱり書くしかない……、と思って一から勉強して書きました。

本を書くこうという気持ちの中には、やはり父の人生というのがずっと心に引っかかっていました。軍人とは何かが分からなかったと言いましたが、栗林中将の人生、一緒に亡くなった部下の方の思いなどを見ていくと、軍

人ってこういうものだったのかもしれないと、ちよつと分かった気がしました。後になって、私は父の人生を知りたかったのではないかと気づきました。父が目指した軍人とは一体どういうものなのだろう、という問いがずっとあったのだと思います。栗林中将には二万人の部下がいらして、私の父は終戦後に十八歳を迎えた下っ端。すでに授業もまともにできず、何をしてたのかと聞いたら、爆撃が激しくなつて、滑走路の穴埋めばかりをやっていたと言っていたくらいです。栗林中将とは天と地ほど違います、軍人を選んだことに変わりない。ですから、亡くなった栗林さんや部下の方を通して、父がなろうとした軍人というものにちよつと近づきたかったのかな、と思いました。

本日のテーマは「昭和の父と運命の娘」なのですが、お話を伺った方は、若い時に終戦を迎え、その後も長く生きてこられました。ですから、戦後をどう生きられたかということも、一つのテーマとしております。一作年の二月から昨年の二月まで、日本経済新聞の土曜日版に週一回連載していたものを、本にまとめたものからお話いたします。

どんな人を取り上げているかといえますと、渡辺和子さん、齋藤史さん、島尾ミホさん、石垣りんさん、茨木のり子さん、田辺聖子さん、辺見じゅんさん、萩原葉子さん、石牟礼

道子さんの九人。みなさん有名な作家ですが、今日はその中で渡辺和子さんと齋藤史さんのお話をさせていただきたいと思います。このお二人には、お父様が二・二六事件に非常に深く関与していたという共通点があるんです。年代も違いますが、お父様はともに軍人です。お二人のことを描きたくて、この連載を始めたという経緯もあります。

父の最期を見守るために―渡辺和子

●渡辺和子

一九二七年、北海道旭川市生まれ。父は当時、旭川第七師団長だった渡辺錠太郎。その後父の転属で東京に移り、一九三六年、九歳の時に、二・二六事件に遭遇。教育総監となっていた父・錠太郎が青年将校に射殺されるのを間近に目撃した。

一九四五年四月、母の反対を押し切つて十八歳でカトリックの洗礼を受ける。クリスチャンに。聖心女子大学、上智大学大学院を卒業後、二十九歳で修道院に入る。修道女会の命によってアメリカへ修練に行き、滞在中に教育哲学博士号を取得。一九六三年ノートルダム清心女子大学の学長、一九九〇年に同学園の理事長に就任した。

二〇一二年、八十五歳のときに随筆集『置かれた場所で咲きなさい』を刊行、現在までに三百万部を超えるベストセラーとなった。

二〇一六年、八十九歳で死去。

プロフィールの最後にあるよう、エッセー集が三百万部を超えるベストセラーとなったのは驚くべきことです。人は自分がないもの羨み、今を変えようと必死にもがくものですが、自分のいる環境に目を向けて今を受け止めることで、現実がよくなっていく……、いわゆる説教ではなく、実感のある率直な言葉は説得力を持って心に響きます。

二・二六事件とは、一九三六（昭和十一年）二月二十六日に陸軍の皇道派と呼ばれる青年将校が中心となって起こしたクーデターで、約千四百名の兵士が首相官邸や警視庁、朝日新聞社などを襲撃し、政府要人や警察官など数名を殺害、重傷を負わせました。永田町一帯を兵士が占拠し、戒厳令が敷かれるなど一時は騒然とした状況となりましたが、二十九日には反乱軍として鎮圧されました。渡辺邸には安田優少尉、高橋太郎少尉らが襲撃し、表門から入り玄関前に機関銃を据えてこれを乱射、裏庭から室内に侵入して廊下から寢室に向け機関銃を発射、さらに銃剣で切り付けました。殺されることを覚悟した錠太郎氏は、傍にいた次女の和子さんを近くの物陰に隠し、反乱軍を迎え撃ちました。撃ち込まれた弾は四十三発、弾が飛びかう室内で、和子さんが無傷だったのは、ほとんど奇跡でした。

和子さんは父が五十二歳の時の子供で、一

番上の姉とは二十二歳の年齢差があり、間に兄が二人いました。四十三歳になっていた母は、遅い出産をためらったと言います。その娘が父の悲惨な死を目撃したのは、九歳の時でしたが、和子さんはこう言っています。

「いいえ、私はあの場所にいることができて、本当によかった。私がいなければ、父は自分を憎んでいる者たちの中で死ぬことになりました。私は父の最期の時を見守るために、この世に生を享けたのかもしれないと思うときがあります」

ですから、それだけでもすごい人だなと思ったのですが、父と娘の絆の強さ、彼女が辿った運命のものの凄さみたいなものを直接伺った時のことは、今でも本当に忘れられない出来事です。

錠太郎さんの死後、父の絶対的な庇護のもとで育った和子さんは、錠太郎さんの子供として恥ずかしくないよう厳しく育てる母と、次第にそりが合わなくなっていくます。その理由を、自分は生まれつき高慢ちきな人間だった、生まれた時から父が中将、学校の成績もよかったから、母を軽んじていたのかも……と、回想されています。しかし母の苦勞をわかりながらも、反発心がやまないことで、自己嫌悪に苦しむ和子さんは、こんな嫌な自分のままで死にたくないという一心から、母校・雙葉学園での洗礼を決意します。

「お父さまは仏教徒として亡くなったのに、違う宗教を選ぶなんて」と、母すゝは和子が洗礼を受けることに強く反対しました。それを押し切って受洗した和子を、母は何かにつけて「あなたはそれでもクリスチャンなの。少しもよい人間になどなっていないじゃないの」と叱ります。身近な場所や人をなおざりにして、ボランティアに励む偽善を指摘したのが母でした。母の言葉が私には一番痛かった、と言います。

二・二六事件から五十年、一九八六（昭和六十一）年七月十二日、和子さんは東京・元麻布で行われた法要に出席しました。この日は青年将校十五名が刑死した日。すすめてくれたのは、『妻たちの二・二六事件』の著者である澤地久枝さんでした。青年将校たちの奥さんだった人に取材しており、その他の遺族の方ともお付き合いがあつて、和子さんが出席することを望んでいると聞かされて、決心したといひます。

ただ、それは、敵を許すというキリスト教的な心があつたわけではなく、和子さんが考えたのは、父なら何と言うか、ということでした。読経を聴いている時は複雑な気持ちでしたが、お墓の前で線香を供えて手を合わせると、二人の男性がいて深々と頭を下げていました。それは錠太郎さんにとどめを刺

した高橋少尉と安田少尉の弟たちでした。

叛乱軍という汚名を受けた身内を持ったこの方たちは、被害者の娘であつた私よりもっとつらい五十年間を過ごされてきたのだということ、その日を境に気がつき、気持ちに区切りがつかしました。

目の前で四十三発の銃弾を浴びて血まみれになった父が、その死をもって私に教えてくれたのは、人の命がいかにほかないかということ。そして、暴力をもって世界を変えようとした時、どんなに恐ろしいことが起こるかということでした……。と和子さんはインタビューの後で話してくれました。

● 齋藤 史 ひたすら詠み続けた生涯―齋藤 史

一九〇九年、陸軍将校で歌人でもあつた齋藤瀧の長女として東京に生まれる。小学校時代、および女学校卒業後の十五歳から十八歳まで、父の旭川第七師団勤務のため旭川市で過ごした。父は二度目の旭川勤務の時、短期間だったが渡辺錠太郎の部下だった。

一九三六年の二・二六事件で、反乱軍を幫助したとして父が禁錮刑となる。処刑された青年将校の中には、旭川で小学校の同級生だった栗原安秀がいた。

若山牧水に勧められて十代で作歌を始め、一九四〇年に第一歌集を上梓。以後、二〇〇

二年に九十三歳で死去するまで歌を詠み続け、二・二六事件をうたった歌も多い。釈超空賞、読売文学賞など多くの賞を受賞し、一九九三年には女性歌人で初めて芸術院会員となった。一九九七年の歌会始の儀では、召人（天皇に招かれて歌を詠む人）を務め、天皇（現在の上皇と対面している）。

北海道・層雲峡に、かつて陸軍の療養所があり、その跡地に古びた石碑が建っています。碑面には「第七師團轉地療養所建設記念碑」とあり、漢文体で二十二行にわたって、この地に療養所が建つに至った経緯が記されています。そこに、渡辺錠太郎さんと齋藤瀧さんの名前があり、二人は旭川にあった第七師団の師団長と参謀長として、ともに療養所の建設に尽力。後に錠太郎さんは二・二六事件で殺害され、瀧さんは叛乱軍の青年将校らを支援したとして入獄することになります。この碑が建つてわずか八年後、両者はいわば敵味方に分かれたのです。

・錆色の檜落葉積む 二・二六に殺されし錠太郎の名ある碑（いしぶみ）
・ゆくすゑを誰も知らねば渡邊・齋藤の名もつらねたり一つ碑の面に

史さんは、一九八〇（昭和五十）年、七十一歳の時にこの碑を訪れて、二人の名前が同じ碑面に刻まれているのを見て複雑な思いを

抱いたようです。一方和子さんは、八十歳だった二〇〇七（平成十九）年に訪れており、時を隔てて、それぞれの娘が同じ碑の前に立つことになりました。

「やんちゃ小僧みたいな男」「変な軍人」「自由人」——八十代になった齋藤史さんが、父・瀧さんを評した言葉です。確かに瀧さんは明治の軍人としては風変わりだった。短歌だけではなく小説にも手を染め、演劇や映画から落語、義太夫まで文化全般を愛好するディレクター。ひとり娘の史さんは三、四歳のころから寄席通いのお供をし、地方に赴任していたときも、節劇（浪曲にのせて行う芝居）やデロレン祭文（大道芸の一種）などに連れていかれたといいます。

軍人を志して陸軍幼年学校、士官学校に進んだ瀧さんは、日露戦争従軍時には、佐佐木信綱に戦地から手紙を出して、帰国後に門弟となりましたが、当時の陸軍では歌詠みは文弱の徒と見なされ、出世の妨げになるといさめられました。が、「文武両道」という言葉がある」と意に介さなかったといいます。

二・二六事件当時身重だった史さんは、父が事件に連座して禁錮刑を受けたことを知ります。

・暴力のかくうつくしき世に住みてひねもすうたふわが子守りうた

「暴力のかくうつくしき」というのはすごい言葉だと思いますが、これはご本人がインタビューに答えて「暴力が美しいはずはありません」とおっしゃっています。では、何故、あの事件の凄惨な暴力を、あえて反語的に言わなければならなかったのでしょうか。

こんな歌も残っています。

・正史見事につくられてゐて物陰に生きたる人のいのち伝へず

「正史」というものは権力のある勝者が書き残しますが、力がなかった敗者は、歴史の陰で本当に言いたいことがあったけれども、忘れられる、あるいは誤解されたままになる。ですから、命による力関係には、世に出ていない話があるんだとおっしゃっているんです。

史さんには、二・二六事件を起こした青年将校の一人で、旭川時代からの幼なじみで栗原安秀中尉という人がいました。

・濁流だ濁流だと叫び流れゆく末は泥土か夜明けか知らぬ

・白きうさぎ雪の山より出でて来て殺されたれば眼を開き居り

・額（ぬか）の真中に弾丸（たま）をうけたるおもかげの立居に憑きて夏のおどろや

これはみんな処刑の時の歌なんです。処刑に立ち会った看守によれば、青年将校らは目隠しをされ、射手に誰かわからぬよう、腹まである細長い白布で顔を覆われ、その上から、

眉間に黒点を記した布で頭を縛られました。一番目の射手が前頭部を狙って撃ち、絶命しないときは心臓を撃つことになっていました。遺族に返された遺体は、眉間に弾痕があり、無念の形相だったといえます。

この経験がきっかけで、それまでの想像の世界を飛び回るような独創的な短歌から、時代を鋭く見つめる歌を詠むように変わってきます。国の動向に左右され、政治の都合で命を落とすこともあるのが軍人の運命。父、そして友人である青年将校らの人生を通して、史さんはそれを見届けることになります。「父を歌ふ」の最後の一首にはこう記されます。

・もののふの父の子に生まれもののふの父の寂しさを吾が見るものか

父の人生は、軍人としては恵まれなかったけれどすごく真面目な人だった、軍人というもののふの寂しさを自分は見てきたな、という歌だと思っています。

・ある日より現神（あきつかみ）は人間（ひと）となりたまひ年号長く長く続ける昭和
敗戦後、天皇が人間宣言をした時、瀏さんは史さんと一緒にそのラジオ放送を聞いたそうです。栗原たちがこれを知らずにすんでよかったとおっしゃったといえます。

事件から六十一年経った一九九七（平成九年）、史さんは宮中歌会始の召人（めしうど）に選ばれます。時代が昭和から平成へ移ったと

はいえ、天皇に召し出されて歌を詠むことをどう思っていたのでしょうか……。

子（娘）が父を書くには、「近い目」と

「遠い目」の両方が必要です。前者は家族として肉親として日々父親を見ている目、後者は社会の中で父親を一步引いて見て、社会の中で父がどのような存在であったのかを見極める目だと思うんです。子どもの頃には思ってもいないけれど、成長するにつれ父とある程度距離を取って、社会の中でどういう人だったのか、歴史の中でどういう人だったのか、どういう運命をたどった人だったのかというのを見るようになります。この本に書いた女性たちは、皆父親より長生きしています。それによって若い時に見た父と、自分が父の年齢を追い越してからでは、変わっていきます。亡くなってからでも、父親を知ることができるのだと感じました。歴史を学ぶとか、父の人生を学ぶことによって、いつまでも父親と出会い直すことができるんです。

彼女らの父親は全部が昭和という激動を生きた人たちです。違う時代なら違う生き方ができたかもしれないけれど、この時代にはこう生きるしかなかったのだと思います。私は娘のほうが父親を理解できる気がしますので、それを最後のメッセージとして皆さんにお伝えして、講演を終わりたいと思います。

【講師略歴】

梯 久美子（かけはし・くみこ）

ノンフィクション作家。

一九六一（昭和三十六）年、熊本市生まれ。北海道大学文学部卒業後、編集者を経て文筆業に。

二〇〇五年のデビュー作『散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道』で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。同書は米、英、仏、伊など世界八カ国で翻訳されている。以来、丹念な取材と精緻、静謐な文章で常に話題作を発表。

著書に『世紀のラブレター』『昭和二十年夏、僕は兵士だった』『昭和の遺書——五十五人の魂の記録』『百年の手紙——日本人が遺したことば』『狂うひと』『死の棘』の妻・島尾ミホ（読売文学賞、芸術選奨文部科学大臣賞、講談社ノンフィクション賞受賞）、『廃線紀行——もうひとつの鉄道旅』『愛の顛末——純愛とスキャンダルの文学史』『原民喜——死と愛と孤独の肖像』『サガレン 樺太／サハリン——境界を旅する』などがある。

二〇二二年十月『この父ありて娘たちの歳月』を出版。戦中・戦後の激動の時代、書くという困難な道を選んだ九人の女性たち。唯一無二の父娘関係が生んだ、しなやかで力強い彼女たちの生き様を描く。

◆新入会員ご紹介

前会までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。(敬称略)



たかむら まさひで
高村 昌秀
昭和六十二年・法学部卒
(株)タカムラ
代表取締役社長
東京都世田谷区在住



かたぐり まさみ
片倉 正美
平成三年・経営学部卒
EY新日本有限責任監査法人
理事長
東京都港区在住



いしだ かずし
石田 和士
昭和六十年・法学部卒
世紀東急工業(株)
代表取締役専務執行役員
神奈川県横浜市在住

◆明大ニュース

●明治大学校友会

二〇二三年度定時代議員総会を開催

明治大学校友会は七月三十日、駿河台キャンパス・アカデミーホールで二〇二三年度定時代議員総会を開催した。代議員総会は校

友会の会則が定める重要事項を審議・決定する会議で、当日は代議員総数五百九十六人中、委任状を含め五百八十一人が参加。来賓として、柳谷孝理理事長、大六野耕作学長をはじめ、田村駿評議員会議長、三木一郎評議員会副議長、萩村隆幸連合父母会会長など法人役員、大学関係者らが出席した。

物故校友への黙とうの後、徳丸平太郎副会長の開会の辞でスタートした総会は、冒頭、北野大会長が登壇。全国から大勢の代議員が参集したことへの謝辞と、日頃の大学から校友会へのさまざまな協力に対する感謝が伝えられた。続いて、柳谷理事長、大六野学長、萩村連合父母会会長による祝辞と進行した。萩村連合父母会会長は、「明治はひとつ」のスローガンを掲げる校友会と同心協力しながら、父母会も明治大学の一員として精一杯活動していきたいとの意向を示した。

その後、議長団・議事録署名人らを選出して議事に入り、昨年度会務の報告と決算、二〇二三年度事業計画・予算、役員ならびに会長推薦代議員選任などについて審議し、それぞれ提案どおり承認された。

次期会長に選出された北野会長からは、校友会の目的である「母校支援と校友相互の親睦」に「校友相互の支援」も加えて活動を行っていくこと、若手や女性の参加者を増やしていくこと、各支部独自の活動を支援して

いくこと等の方針が示された。また、「明治はひとつ」の精神で、父母会やその他の団体とも協力し一緒に大学を盛り上げていきたいとの思いが語られた。

その後、卒業生校友表彰、全国校友大会旗リレーに続き、退任役員と次期本部役員の紹介が行われた。さらに、柳谷理事長と北野会長による万歳三唱が行われ、フィナーレは、体育会応援団の現役部員と同部卒業生による校歌斉唱。中藤有里さん(二〇二三年農卒)、中山実優さん(二〇二三年法卒)、竹内さくらさん(総合数理4)がリーダーを務め、校友一同、声高らかに校歌を斉唱、松本穰副会長が閉会の辞を述べ、総会は盛会のうちに終了した。

●「児玉圭司『願晴る』研究振興賞」

理工・相澤守教授に

七月二十六日、駿河台キャンパス・矢代操ホールにて「児玉圭司『願晴る』研究振興賞」表彰式が挙行された。これは、本学校友の児玉圭司氏(一九五七年経営卒)による寄付金を原資として、研究で顕著な功績を挙げた本学の教員を表彰する賞で、過去五年間の国際研究論文の論文数や被引用数等の評価を基に表彰者を決定しているもの。

今回の表彰式では、二〇二二年度受賞者の相澤守理工学部教授への表彰が行われた。相

澤教授の研究分野は、無機材料・物性無機材料、生体材料、組織工学（再生医学）で、研究テーマは高度医療を支援するハイパフォーマンスバイオマテリアルの開発と生物学的評価。

表彰状授与および目録贈呈、大六野耕作学長のあいさつに続いて、児玉氏が登壇した。児玉氏は、振興賞の名前に付けられた「願晴る」願いを込めて晴れやかに努力する」という言葉に込めた思いを紹介し、「相澤教授の研究は、日本が抱える大きな課題である国民の健康寿命を延ばすことにつながると伺った。今後さらに研究を発展させ、多くの人々に明るい希望の光をもたらしていただきたい」と期待を寄せた。

表彰を受け、相澤教授は、「第一回目の受賞者である理工学部の小椋厚志教授から、『研究を前面に押し出して表彰していただけたありがたい賞』だと聞いていたので、自分も受賞することができてとてもうれしく思う」と笑顔であいさつした。さらに、「研究成果の社会実装に向けて進めていきたい」と意気込むとともに、関係者への謝辞を述べた。

●OB社長

▽wing(株)大汐信光氏（一九八九年商学部卒・五十七歳）

▽(株)アドバネクス 朝田栄太郎氏（一九六九

年商学部卒・七十六歳）

●「明治大学戦没学徒忠霊殿」慰霊祭

明治大学の戦没学徒の御霊を慰め鎮める忠霊慰霊祭が七月十日、新潟縣護國神社（新潟市中央区）にて厳かに執り行われた。明治大学からは柳谷孝理理事長、大原幸男経営企画担当常勤理事および長吉泉顧問が出席。校友会からは北野大会長、徳丸平太郎副会長および高橋淑浩校友会新潟県支部長ら関係者三十四人が参列した。

明治大学校歌の奉納、玉串拝礼に続き、あいさつに立った柳谷理事長は、同支部および同神社の関係者への謝意とともに、忠霊殿に祭られている本学諸先輩方の御霊に対し、「戦後七十八年が経過したが、ロシアによるウクライナ侵攻など令和の世になってからも繰り返される戦争の悲惨な現実を決して風化させることなく、明治大学はこれからも人類の平和に貢献し続ける大学として一層の発展を目指す」と力強く決意を述べた。

※明治大学戦没学徒忠霊殿

学業の道半ばにして学徒出陣などで戦死した明大生の戦没者を祭る霊廟。戦時中は駿河台校舎の旧図書館内に安置されていたが、新潟県出身校友の尽力により、一九五〇年に新潟縣護國神社に移された。二〇〇六年には、同神社のご厚意により、本殿脇に本学独自の

「忠霊殿」を新たに建立。以後、毎年、理事長ら大学関係者が校友会新潟県支部と共に慰霊を行っている。

●二〇二三オープンキャンパス

明治大学の各キャンパスを受験生らに開放し、大学生活の一端に触れてもらう盛夏の恒例行事「オープンキャンパス」が八月、駿河台・生田・中野の三つのキャンパスで開催された。八月二日、三日に駿河台キャンパス・中野キャンパス、八月六日、七日に生田キャンパスに分かれて実施された。

全日程とも事前参加登録制で行われ、四日間で約二万六千人の高校生や保護者らが来場。模擬授業や現役明大生によるトークライブ、キャンパス見学ツアーなどに加え、研究室・ラボツアーやゼミの取り組みなどを学生が趣向を凝らして紹介する独自企画についても多くの参加者でにぎわった。

受験生らは、多彩なプログラムへの参加や現役学生・教職員との触れ合いを通じて、大学生生活への期待と、明治大学での学びに関心を深めた様子だった。

●第二十回シェイクスピアプロジェクト

『ハムレット』

明治大学シェイクスピアプロジェクト（MSP）は、大学主催の学校行事としてシェイ

クスピア作品を上演する日本最大規模の学生演劇です。原文の翻訳をはじめ、演出、企画運営、舞台美術など、公演に関わる全てのプロセスを明大生が手掛けます。

今年度はシェイクスピア作品を代表する四大悲劇の一つ『ハムレット』を上演します。「生きていく上での悲劇に寄り添う」をテーマに、人が誰しも感じたことのある不安や苦悩をハムレットの物語に乗せて描き出します。MSP二十年の歴史と未来を、ぜひ劇場でご覧ください。

〔原作〕 W・シェイクスピア

〔翻訳〕 コラプターズ（学生翻訳チーム）

〔プロデューサー〕 宮崎明理（文2）

〔演出〕 高橋奏（文3）

〔監修〕 西沢栄治（JAM SESSION）

〔コーディネーター〕 井上優（文学部教授）

〔主催〕 明治大学

〔後援〕 明治大学連合父母会／明治大学校友会／連合舞台会

〔日程〕 十一月四日（土）～六日（月）

全五回公演（千秋楽公演はライブ配信予定）

〔会場〕 駿河台キャンパス・アカデミーコモン三階アカデミーホール

〔お問い合わせ〕 mejibunpro@gmail.com

第二十回公演を記念して、明治大学博物館での特別展示も実施予定です。

● 減塩食を濃い味に「エレキソルト」

総合数理・宮下研究室とキリンホール

ディングス(株)が共同開発

総合数理学部の宮下芳明研究室とキリンホールディングス(株)の共同研究で開発された「エレキソルト」の実証実験「減塩ワークショップ」がハンス新宿店で行われた。ワークショップは七月十八日から二十日までの期間に計三回行われ、一般客約三十人が参加した。

エレキソルトは、減塩食の塩味を約一・五倍に増強させる独自の電流波形の技術を搭載した、スプーンとお椀型のデバイス。人体に影響しないごく微弱な電流を用いて疑似的に食品の味の感じ方を変化させる「電気味覚」の技術が活用されている。また、スプーンだけでなくお椀型のデバイスもあることで、ラーメンや汁物を楽しむこともできる。

参加者らは用意された減塩食をエレキソルトで試食し、電気味覚技術によって実際の塩分量よりも味が濃く感じられるのか体験。試食後は、「本当に味が濃くなった」「おいしい」などの声が上がリ、多くの人が好意的に受け止めている様子だった。

塩分の取り過ぎが社会課題となる中で、宮下研究室と同社は二〇一九年から共同研究を行ってきた。今回のワークショップは、エレキソルトの販売に向けた実証実験の一環。実

験結果を検証しデバイスの開発を進め、キリンホールディングス(株)から二〇二三年末の発売を目指している。

● 「生田キャンパス第二中央校舎（仮称）整備計画」地鎮祭を挙行

生田キャンパスにおける多様な学びの推進、教育施設の充実に目的として、二〇二五年春に「生田キャンパス第二中央校舎（仮称）」の竣工と、二〇二六年春に外構整備等の完了を予定している。その地鎮祭が七月十二日、建設地である生田キャンパスで執り行われ、柳谷孝理事長、大六野耕作学長をはじめ法人役員・大学役職者が参列。さらに、設計監理業者の(株)日建設計、施工業者の(株)フジタとともに工事の無事を祈願した。

地鎮祭後にあいさつに立った柳谷理事長は、生田キャンパスでは二〇一四年に竣工した第一校舎6号館以来、十一年ぶりの新校舎となることに言及し、「創立一五〇周年やその先の未来に向けて、『研究のMEIJI』として世界でのプレゼンスを高めるため、学校法人として支えていきたい」と展望を語った。

さらに、大六野学長があいさつに立ち、「アジアの中核になれるような研究の力を生み出したい」と述べた上で、「多様な人々が出会う新しい空間になってほしい」と新校舎への期待を込めた。

【建設概要】

階数…地上6階

延床面積…約1万3278㎡

1階…図書館、ラーニングコモンズ

2階…図書館

3階…図書館、ラーニングコモンズ

4階…教室、ラーニングコモンズ

5階…6階…教室

●神田警察署から明治大学へ感謝状

明治大学は七月二十六日、警視庁神田警察署と神田防犯協会から防犯功労表彰を受けた。これは防犯対策などを積極的に推進し、犯罪のない神田の街づくりに貢献した個人と団体を同署がたたえるもの。本学は学生によるボランティアや千代田区内でのパトロールなど、地域と密着した活動の数々が総合的に評価されて受賞に至った。

同署内で行われた表彰式では、川合真人署長が「神田の街の安心安全は、皆さまを中心とした日々の地道な協力があってこそ実現できること。引き続きご尽力を賜りたい」とあいさつし、十四の団体と十三人の個人に感謝状と記念品が贈呈された。

西山春文副学長（学務担当、商学部教授）は「日頃の教職員と学生のパトロールをはじめとした防犯活動が評価されたことは大変光栄」と述べるとともに、今後も継続してキヤ

ンパス周辺地域の街づくりに貢献していきたいとの意向を示した。

●農・戸田安香特任講師

「アジアの科学者100人」に選出

農学部の戸田安香特任講師（食品機能化学研究室）がこのたび、Asian Scientist Magazineの二〇二三年度版「アジアの科学者100人」に選ばれた。

Asian Scientist Magazineはシンガポールの科学技術雑誌で、各研究分野で顕著な業績を収めたアジアの研究者を二〇一六年から毎年掲載している。戸田特任講師は国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）主催の「輝く女性研究者賞（ジュンアシダ賞）」を二〇二二年に受賞するなど、「鳥類や霊長類における味覚受容体の進化」に関する研究成果が認められ、今回の選出に至った。

●二〇二三年度春学期「交換留学生修了式」

明大生主導で初のプロムパーティーも

明治大学での交換留学プログラムを春学期で修了する外国人留學生の「交換留学生修了式」が七月二十七日、駿河台キャンパス・グローバルフロントで行われ、一学期間または一学年間の留学を終える留學生ら百九十二人の門出が祝われた。交換留学プログラムは、明治大学と海外の大学間または学部・研究科

間の協定に基づくもので、今回修了を迎えた留學生は、二十三カ国・地域九十九大学からの受け入れで過去最高の参加者数となった。

式典は、日本語教育センター長の山田亨文学部准教授のあいさつ、国際連携本部長の小室輝久副学長（国際交流担当、法学部教授）の祝辞、「交換留学生アンバサダー制度」による表彰と進行的した。これは、この春学期より新たな試みとして導入された取り組みで、最も多くの活動に参加したオーストラリア・ニューサウスウェールズ大学からの留學生、オリーフエ・ムハンマド・アシュラフ・ステイーブンさん（国際日本）が表彰された。

その後、留學生全員への修了証の授与に続いて、中国・中央民族大学からの留學生、王静芸さん（文）が登壇し、「私たちの心に刻まれた愛に満ちた瞬間は、一生の宝物となるでしょう」と日本語でスピーチを行うと、会場は大きな拍手に包まれた。

七月二十九日には学生団体MUBO (Meiji University Borderless Organization) によるプロムパーティーが岸本辰雄ホールで開催された。プロムパーティーとは主にアメリカやカナダの高校で学年末に行われるフォーマルなダンスパーティーのことで、母国へ帰国する留學生を見送り、日本人学生との交流促進を目的に初めて企画された。

ドレスアップした交換留學生と明大生約二

百人が参加し、交流ゲームや記念撮影、隅田川花火大会の花火を眺めながら食事を楽しむなど大いに盛り上がった。MUBO代表の岩田夏子さん（農4）は、「母国でのプロムの文化を知っている留学生と共に意見を交換しながら準備を進めてきた。参加者が次第に仲良くなつていく様子が伝わってきて、開催して良かった」と笑顔を見せた。

● サッカー部

佐藤恵允選手が独ブンデスリーガ「ヴェルダー・ブレーメン」に入団

体育会サッカー部所属でU-22サッカー日本代表の佐藤恵允選手（文4）がドイツブンデスリーガ1部ヴェルダー・ブレーメンと契約を締結し、八月一日より同クラブに加入することが発表された。このことを受け、明治大学は七月二十日に駿河台キャンパス・紫紺館で記者会見を実施した。

会見では、サッカー部の栗田大輔監督から契約締結に至る経緯などが紹介され、「壁が高くなるほどそれを乗り越え、目の前のチャンスをつかむ何かを持っている選手。夢に向かって突き進んでほしい」と期待の声がかけられた。

続いて佐藤選手から、同クラブへの加入について報告が行われ、「明治大学への愛や思いは強く、四年間明治で戦い抜きたいという

思いがあったが、栗田監督から『この半年でチャンスをつかんで来い』と背中を押していただき、八月から加入する決断をした」と振り返った。さらに、「チームの中心選手となるような活躍をしたい」と意気込んだ。

その後、同クラブのフットボール部門責任者クレメンス・フリッツ氏から寄せられたメッセージの日本語訳が読み上げられた。

同クラブへの加入に伴い、佐藤選手は七月末をもって体育会サッカー部を退部し、新たな環境に飛び込む。大学には在籍を続け、二〇二四年三月の卒業を目指す。佐藤選手の活躍にご期待ください。

● バスケケットボール部

韓国・高麗大と五十回目の定期戦

明治大学体育会バスケットボール部と韓国・高麗大学校バスケットボール部の定期戦が八月四日と六日の二日に、明大で開催された。この定期戦は一九六八年に開始し、両大学が相互に訪問する形で実施。四年ぶりの開催となった今年は五十回目を迎え、バスケットボールの技術向上はもちろん、部員たちの国際交流を目的に行われている。

四日に駿河台キャンパス・矢代操ホールで行われた表敬訪問では、明大から西山春文副学長（学務担当、商学部教授）、副学生部長の小林尚朗商学部教授をはじめバスケット

ボール部の関係者が出席。高麗大からはキム・ウン部長を筆頭にコーチ陣、OBらが来校した。

あいさつに立った西山副学長は歓迎の意を示すとともに「参加した両大学の部員には、この交流を生かして、社会に出てから日韓交流の積極的な架け橋になっていただきたい」と語り、キム部長は「国境を超えたスポーツマンシップと、世代を超えた友情のような精神を大変うれしく思う」と明大からの歓迎への謝辞を述べた。その後、両大学の関係者一同での記念撮影とレセプションが行われた。

定期戦は四日にリバティタワー地下三階で、六日には和泉総合体育館で行われ、四日は72-77で高麗大が勝利、六日は59-53で明大が勝利し、1勝1敗の引き分けとなった。

● FISUワールドユニバーシティゲームズ

明大勢が九個のメダルを獲得

七月二十八日～八月八日に中国・四川省の成都で開催された学生の国際総合競技大会「FISUワールドユニバーシティゲームズ」（旧称：ユニバーシアード）に明治大学体育会から多数の学生が出場し、水泳部の田渕海斗選手（情3）が男子四〇〇メートル個人メドレーで金メダルを獲得するなど、九個のメダル獲得に貢献した。卓球部の宮川昌大選手（情4）も銅メダルを二個獲得。



経済、法曹、文化など各界でご活躍の明治大学OB諸氏よ！ 来たれ！「連合駿台会へ！」

「連合駿台会」は、明治大学を卒業された、経済人・法曹人・文化人が集まり、母校を側面から支え、将来を支援するOB組織です。1953年に設立された「茗水クラブ」と、1964年に設立された「明友クラブ」を2002年に統合して設立された歴史ある会です。ちょうど今年で70周年を迎えております。

これを記念して、この9月に創立70周年記念例会を開催いたします。明大OB諸氏が、脈々と積み上げてこられたこの会は、年を重ねるごとに意義深い交流の場となっています。

主に大学支援として、優れた大学の研究成果を顕彰して、学術賞・学術奨励賞の授与や学生対象のプレゼンテーション大会の開催、留学生支援、その他文化事業の支援など多岐に渡っています。

また、会員相互の親交としては、ビジネスの情報交換や、著名人の講演会、バス旅行、ゴルフ会などの催し物を開催しています。

先輩諸氏が築かれてきたこの「連合駿台会」を大きく発展させることにより、母校明治大学をさらに、名実ともに冠たる最高学府の代表となるべく、応援ができるものと思います。ぜひ皆さまと共に、意義ある楽しい活動ができればと願っております。



連合駿台会会長
田村 駿
(明治大学評議員会議長)



~~~~~ 各界で活躍されておられる明治大学校友のご入会を歓迎いたします ~~~~~

資料のご請求はこちらまで

連合駿台会事務局

TEL : 03-3296-4747 FAX : 03-3296-4748 HP : <https://www.rengosundaikai.jp>  
Email : [rengosundaikai@silk.ocn.ne.jp](mailto:rengosundaikai@silk.ocn.ne.jp)

★明治大学広報(9月1日号)に掲載された大学への支援広告。今後も2ヵ月に1回掲載していく予定です。

### ◆七月例会出席者

青柳勝栄、秋谷勝俊、浅井宏、安達明正、阿部倫明、石川均、泉山和久、伊東正博、伊原敏雄、今村健、宇川一夫、潮田伊佐夫、大竹卓也、大野正美、大原幸男、大前実之、大村託現、奥村勝広、鬼塚和也、金井健、狩野省市、栢森靖、百木田康二、河村博、神田達治、神林光、北野大、木下唯志、清野明男、國井泰成、久保聡、久保田達之助、黒崎昭男、小池康浩、小山修、小山有彦、根田哲雄、根田吉雄、齋藤柳光、三枝富博、坂田英夫、坂本孝行、坂本道昭、佐藤健、佐藤仁、佐藤陽子、佐野公哉、同ご友人、澤野太嘉嗣、志田憲彦、柴尾雅春、柴田清之、杉浦伸二、鈴木啓太、鈴木紘一、鈴木隆志、関口勝裕、関根均、相臺志浩、高澤徹、高見克司、田口幸隆、田村駿、樽見俊之、天童美徳、同ご友人、当山明彦、富水流孝二、永井伸彦、中川敏洋、長瀬琢磨、二井康夫、西澤豊、根岸伸明、野口一哉、萩原裕次、長谷川進一、長谷川俊也、幡谷公朗、馬場範夫、林威樹、平田桂子、福田和彦、古本英樹、堀越孝、真家裕介、横野泰、同ご友人、向井眞一、村岡健、村山友彦、室井恵明、森一朗、柳谷孝、山口大介、山田晃久、山田朝彦、山根俊明、山端康幸、弓野理恵、吉田光一郎、吉田信行、同ご友人、渡邊建三

### 【編集後記】

私が住む青森県では八月上旬のねぶた祭りが終わってお盆を迎える頃には、短い夏を惜しむ声が聞こえてくる、のがこれまでの通常でした。

しかし九月に入った今日も、観測史上最多を更新する真夏日が続いております。

世界文化遺産に登録され日本最大の縄文遺跡と知られる青森市の三内丸山遺跡ですが、この地域が最も栄えた五〇〇年前と日本列島が温暖化していた時期が一致するようです。

つまり今後温暖化が進めば、また青森県が日本最大の集落に返り咲く可能性もあるという事でしょうか。

春の桜、夏祭り、秋の紅葉、雪景色、海の幸、山の幸、様々取り揃えて会員皆様のお越しをお待ちしております。

(泉山和久)